

盛岡市動物公園再生事業における ランドスケープ設計の考え方

令和元年度盛岡市動物公園ランドスケープ計画基本設計報告書より

01 ランドスケープ計画の基本方針

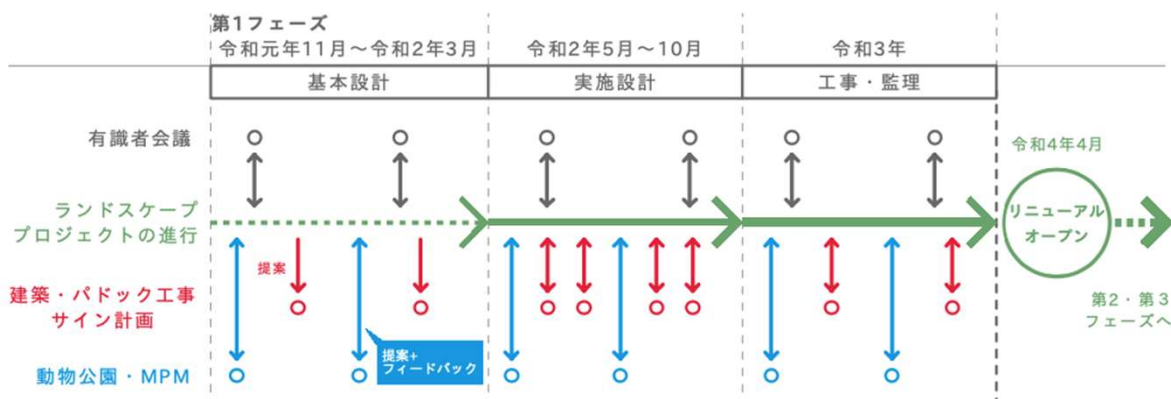
(1) 整備方針

里山環境、動物園、そして公園というこの場所（敷地）の持つ多様な魅力を最大限に活かした計画を行うことで、訪れる人が「One Health～ひとつの環境，健康」を体感し、ここにしかない魅力と多様な過ごし方ができる、楽しさに溢れて何度も訪れたい新しい動物公園を目指す。ランドスケープ設計において、そのために必要な風景の骨格作りとゾーンの再配置，施設配置を行なっていく。

動物園 ≠ 動物『公園』
里山環境＋動物園＋公園が合体した，ここだけの楽しさ

(2) 計画の進め方

本計画は、第1フェーズの「公共投資」である。これからの動物公園のコンセプトを目に見える形で示すことで動物公園に対する負のイメージを払拭し、この先にある民間投資を誘発するための計画として位置付ける。ランドスケープ計画では、この先に行われる「第2フェーズ：官民連携による投資，第3フェーズ：民間投資」を見据えながら，風景と魅力創出の骨格作りとなる整備を行う。



図表：計画の進め方

本計画は，ランドスケープ工事の他に建築工事やパドック工事，サイン工事等，担当範囲を分けて計画を進めていくが，各工事がこの場所の価値や問題意識を共有するプロジェクトチームとして連携し，有識者や園長，飼育員のスタッフと意見交換や，計画案についての説明とフィードバックを繰り返しながら計画を進めて行く。

▶実施設計に入ってから，計画の細かな点まで協働しながら進めていくことで，運営後もコンセプトが持続できる計画を目指す。

▶「平成29年度岩山南公園を活用した観光振興及び地域活性化のための基盤整備調査報告書」「岩山エリア公民連携基本計画」の内容を岩山全体の広域エリアにおける未来予想図として想定しながら，各種動線や施設の配置を行なっていく方針とする。

(3)事業コンセプト「人と動物と自然が共生する動物公園 ～人と動物が参加する、新しい福祉の形～」 の実現に向けて

本計画においてランドスケープ計画では、「OneHealth（生物多様性保全の実践を通じ、人間を含むあらゆる種が健康かつ健全な生態系で持続可能に反映すること）」の実現に向け、人間の健康、飼育動物・野生動物の健康、里山・地球環境の健全化に根ざした計画を行う。この場所において訪れる人も動物も環境も健康な状態で、お互いに幸せに過ごしている風景こそがこの動物公園の居心地の良さとなり訪れるきっかけとなる魅力ある場所を目指す。この点においては、ランドスケープだけではなく有識者会議での専門家の意見、飼育員の意見 を積極的に取り入れながら進め、実現を目指す計画とする。

・動物公園がある岩山エリアは、人間の世界である盛岡市街地と動物の世界である北上山地との境界に位置している。人と動物たちが、中間領域・境界にあればこそ、互いを対等にいたわり合うことが出来る場となることを目指し、非日常的な動物園ではなく、より日常的な動物公園として再生する。

・“新生”動物公園は、人にとっても動物にとっても「幸せな動物園」を目指す。来園者・地域の人々も、飼育動物・地域の野生動物も恩恵を受けて幸せを分かち合え、さらにはその恩恵と幸せの効果をこの地球上の他の地域の人々も、野生動物も受けられる役割を目指す。一方で、その基盤となるのは、より具体的な保全福祉を科学的に実践および評価するための保全研究であり、その取り組みを伝える市民に寄り添う環境教育である。

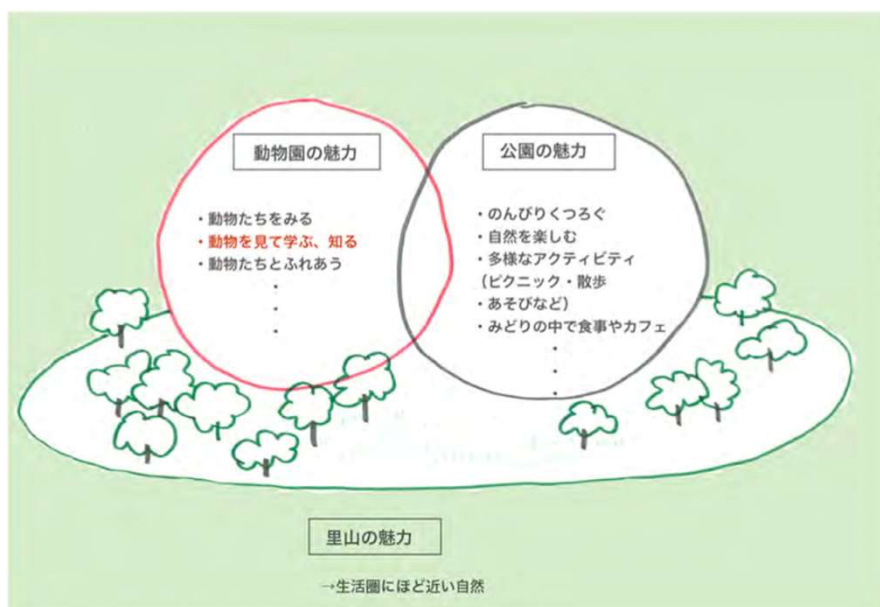
・動物園は、動物を展示して一般公開する場であり、その質の評価のため来園者数が引用されがちであるが、より重要なのは未来の子供達と地球のために何を残せるかを考え実現できるかであろう。多くの人々が集まり、楽しくて笑顔になれる魅力的な場であることは当たり前のこととして、その上で、動物を五感で感じ、知り、学び、考え、自然を守りたいと行動の変化に発展することを促す、自然への入り口であるべきである。動物園では、地球上の多様な生き物に出会うことで何かを感じ、自然への思いを馳せるきっかけとなれる。人工的な場であるが、飼育動物と野生動物を、人と自然をつなぐ架け橋となる。

(4) 設計の方針と課題

(目指す場所のイメージ)

この場所の最大の特徴である自然を生かし、里山の魅力を活かした計画とする。

- ・ 里山環境+動物+公園が合体した、ここだけの楽しさを提供できる場所
- ・ 動物も自然も楽しめる場所、安心して「歩いて楽しい里山の動物公園」
- ・ 動物を見るためだけでなく、日常の延長として気軽に訪れることができる場所
- ・ 市街地に住む住民にとって、自然と触れ合える最も身近な「整備された自然」
- ・ ピクニック、読書、散歩、あそび、デートなど、各々が好きな場所を見つけて思い思いの過ごし方ができる場所
- ・ 好きな動物をじっくり眺めてもいいし、動物たちを眺めながら上記のようなアクティビティも楽しめる、緩く、のんびりした空間



コンセプト実現のために以下3つの方策を盛り込む

1. ベースとなる「里山風景」をきちんとつくる
2. 町から近い「自然の中で楽しめる公園」をつくる
3. 公園の中に動物園を組み込む

1. ベースとなる「里山風景」をきちんとつくる

- ・必要のない舗装面をなるべく減らす
 - ・市街地のような刈込みをなくす
 - ・針葉樹を減らし、高木の下枝を払う等、視線の抜ける明るい森に変換する
- ▶ 視線を抜くところ、バッファーとして残す箇所などメリハリをつけた伐採を行う



2. 町から近い「自然の中で楽しめる公園」をつくる

- ・日常の延長として気軽に何度でも訪れたい場所
 - ・自然の中で多様なアクティビティを楽しめる場所
- ▶ 四季の森の活用、芝生広場でのBBQやキャンプなど
- ・子どもだけでなく、大人も、高齢者も自然を楽しめる場所



3. 公園の中に動物園を組み込む

- ・動物たちの近くでゆっくりくつろげる場
 - ・風景の一部として動物たちを眺められる場
 - ・動物たちと一緒に公園にいるような雰囲気
- ▶ 動物も訪れる人も幸せな場所



02 ランドスケープ計画の整備コンセプト

(1) 空間の体験

現状では常に目の前に道路が広がっており，その道路沿いに動物たちが展示されてという道路風景が，ここでの体験の中心を占めてしまっている。

計画案においては，順路を明確に設定することで展示ストーリーやコンセプトを誰に対しても分かりやすく示し，魅力的な場所毎の個性を活かした「エリア」の体験，エリアの中を通り抜けながら次のエリアへと進む体験を提供する。エリア毎に特色のある様々な居場所を設け，多様なアクティビティと移動と滞在の程よい両立を図る。

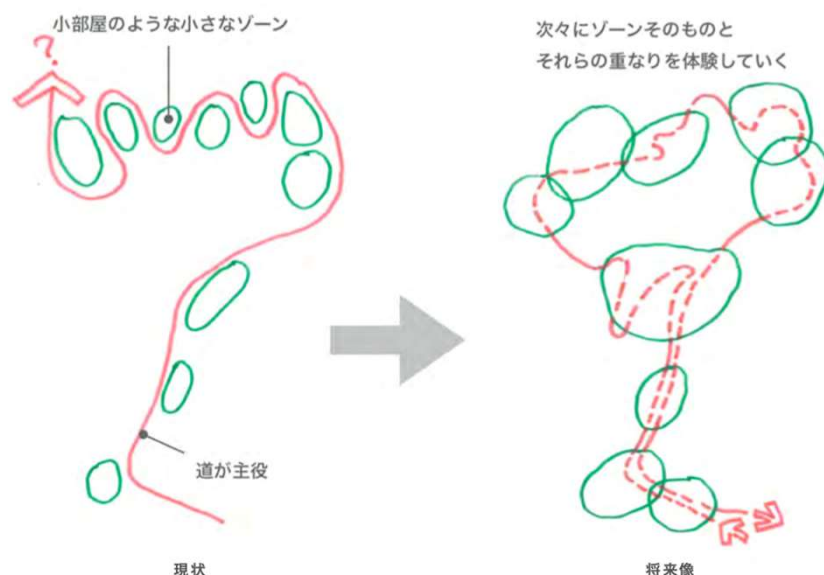


里山エリアの現状

ア 道路中心の体験からエリアとエリアの重なりによる体験へ

道沿いの直列型体験ではなく，次々に展開する エリアに誘われその中を移動する体験を目指す。

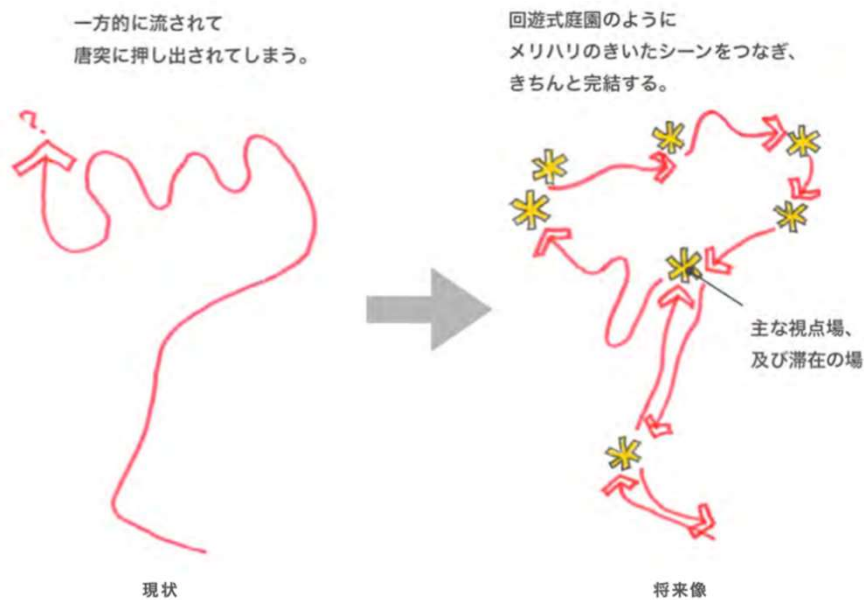
- ・個性のある様々な エリアを設定し，その横を歩くのではなく，エリアが連続する中を楽しみながら歩いている体験を提供する。
- ・森と草地のメリハリをつけることで「空間を開く／閉じる」を明快にして，先を垣間見せる，または暗示するなど人を先に誘うしつらえをする。
- ・エリアごとに異なる様々な居場所（動物をじっくり眺める場所，BBQを行う場所，景色を見ながらのんびりする場所など）を設け，多様なアクティビティと移動・滞在の程よい両立を図る。
- ・エリアの中には，動物たちを間近で鑑賞したり触れ合ったり，動物たちと人間が同じ場所を共有できる空間をつくるなど，動物たちと人間との距離感に様々なバリエーションがあるとこの場所での体験がより豊かになる。



図表：道路中心の体験からエリアとエリアの重なりによる体験へ

イ 道路中心の体験から エリアとエリアの重なりによる体験へ

- ・ ループ動線の設定により、回遊式庭園のような体験を提供でき、ゲストは展開するストーリーを楽しむつつ、きちんと完結する感覚を味わえる。
- ・ 細切れの体験（獣舎）が道路沿いに並び、それが唐突に終わってしまうという空間構成を改善する。



図表：道路中心の体験からエリアとエリアの重なりによる体験へ



物語が唐突に終わる行き止まりの看板

(2)風景の構成

里山の豊かで多様な自然環境を，最大限に活用し享受できるように考える。

- ・風景は資産であり，市民に愛され，この場の価値を高めるものである。

▶複数のゾーンを組み合わせることによって，奥行きのある魅力的な風景をつくり出す。

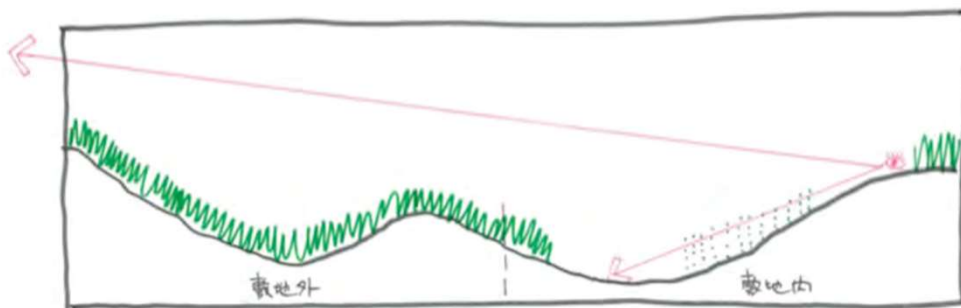
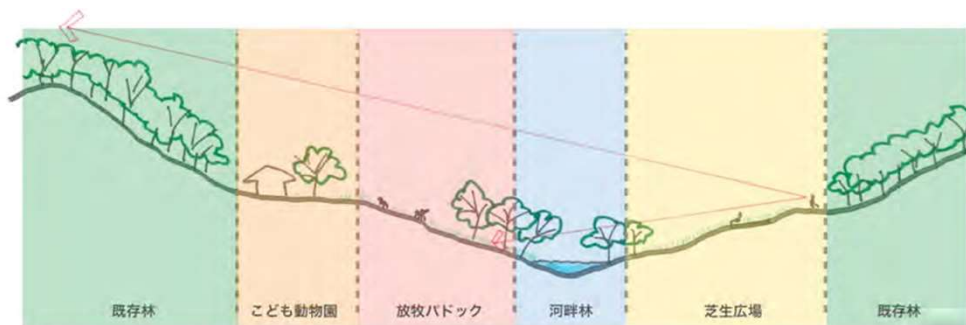
▶動物たちの姿をできるだけ風景の中に取り込み，動物公園としてここに来てしか見られない風景をつくり出す。

▶敷地内の風景(近景，中景)だけでなく，遠景としての山並みも借景として取り込む。

- ・市街地から近いにも関わらず，町から離れて山，森に来たという一種の非日常的感觉を提供したい。
- ・座って休憩する場所でも子供を遊ばせる場所でも，そこから見える風景はとても重要。必ず眺めて楽しい対象があることが大事。それが動物たちの姿であったり，彼らを取り込んだ更に大きな風景であったり，または動物のいない風景であっても同様。

ア エリアのレイヤーとして風景を見せる

- ・複数のエリアを組み合わせることで，奥行きのある魅力的な風景をつくりだす。
- ・動物達の姿をできるだけ風景の中にとりこみ，ここに来てしか見られない風景をつくる。
- ・次に向かうゾーンが見えることにより，ゲストを期待感とともに先へと誘うことができる。



図表：風景の構成

※敷地内の風景（近景，中景）だけでなく，遠景としての山並みも借景として取り込めるか検討する

イ 滞在の場には風景が必要である

- ・くつろぎながらおしゃべりしたり，本を読んだりしているとき，人は必ず何かしら見て楽しい風景を眺めながら行っている。（人は壁を向いては座らない）
- ・滞在の場の魅力とは，その場自体の魅力とそこから見える風景とが必ずset（対）になっている。

盛岡市動物公園再生事業

計画平面図

